

この手紙は八月十七日付で、この指導を始めて四十日日のものです。ここにアスクミーのことが書かれていますが、これは、リーダーズダイジェスト社から製作発売されている、私の監修になる『楽しい漢字』のうちの教育機器の名前です。

これは、録音された漢字カードを、このアスクミーに差し込みますと、この機器がその漢字を読んでくれるようになっていきますので、一人で学習できます。それで、両親の手が少しでも省けるようにと思いましたが、七月二十七日、関西方面へ行く途中、プラットホームまでお父さんに来てもらって、停車中に手渡したものです。

この機器は、子供にもよりますが、親が読んでやるよりも興味を持って漢字に取り組みますので、非常に効果があります。幼児開発協会理事長の井深大氏は、“機械が先生に勝った”という書物で、この機器学習が先生の指導による学習効果よりも高かった、ということを書いていますが、それは事実です。

子供は一般に繰り返しが好きですが、大人はそれが苦手で、なかなか子供の相手がしきれません。そこで、それを決していやがることのない機械にやらせよう、ということで考案したものです。

ところが、愛子ちゃんの場合は成功しませんでした。それは、多くの子供が喜んでするカードの差し込みを、愛子ちゃんは少しも喜ばないからです。その原因は、愛子ちゃんの聴力が低いせいではないかと思えます。

『聞き慣れぬのか、言葉を聞き取り違うことがあります』というのも、実

は聴力の低いことを物語っているのだと思います。だから、機器から流れ出る“言葉”が、よく聴き取れなくて、興味を感じないのだと思います。

元来、機器は音声を発するだけで、口の形が示されませんので、いわゆる“口まね”ができにくいのです。その上、聴覚に障害があってその能力が低ければ、いよいよまねがしにくくなります。

だから、愛子ちゃんの場合は、初めての漢字は、どうしても親が直接口の動きを見せながら読んで聞かせる必要があります。そして、その漢字が覚えられた後に、その漢字のカードを与えて、アスクミーに掛けさせるようにしたら、喜んで機器を使うようになったのではないかと思います。

一般的に言えば、脳障害児は、聴力も普通児より劣っていると考えるなければなりません。だから、漢字を読んで教えてやる場合、口を大きくはっきり動かして、普通より強い声で発音することが必要です。

そうでないと、個々の発音の違いがはっきりと区別できず、従って、それを覚えることができません。発音がよくわからず、それが覚えられないから、そういう学習に興味を感じないのだと思います。

聴力器官も、それを多く使うことによって発達するものですから、愛子ちゃんのように聞くことに興味を感じないようでは、聴力がいよいよ貧弱になります。聴力が弱いから聞きたがらない。聞きたがらないから聴力が発達しない。この悪循環を、どこかでどうしても断ち切らなければいけません。